

イースターと「こおり鬼」

牧師 望月達朗

庭の石臼の中で凍っていた井戸水が、ようやく溶け始めました。吾妻教会の「ペンギン噴水」も凍期休暇（本来ペンギンは寒さには強いはず!?）を終えて、お仕事再開が待たれるところです。庭の桜も、そろそろ咲き始める頃でしょうか。春の訪れは、氷を溶かし、新しい命を芽生えさせてくれます。キリスト教の暦では、イースターまでの日曜日を除く40日間を「レント（四旬節）」と言います。十字架へと至るイエスの苦しみに、思いを馳せていく期間です。ただし「レント」は、古英語で「春」を意味するLentenが語源だそうですから、苦しみの氷が溶ける「春」＝「復活」を見据えた期間でもあることを覚えておきたいと思います。

ところで、「こおり鬼」という遊びはご存知でしょうか。いわゆる「鬼ごっこ」の発展型です。鬼役にタッチされた人は氷のように固まってしまい、その場所から動けなくなります。ところが、仲間にタッチされると氷が溶けて、再び動き始めることが出来るのです。前任地の教会付属の幼稚園では、子ども達の間で「こおり鬼」ならぬ「バナナ鬼」が流行っていました。鬼役にタッチされると、両手を頭の上に突き出し、まるでバナナのようなポーズのまま、その場から動けなくなります。仲間にタッチされると再び動けるようになるのですが、「こおり鬼」とは少しルールが違います。1回タッチされただけでは一皮しかむけず、片手しか降ろせないのです。2回タッチされて初めて、バナナが完全にむけて、動けるようになります。これがなかなか大変で、上に伸ばした手がプルプルと震

え始め、つりそうになってしまうことが度々です。そんな中、ふと思ったことがあります…「おや、これは復活の出来事に似てはいないか?」。

福音書には、病人がイエスに触れると、病が癒され、生きる力が取り戻されていく場面が記されています。当時のユダヤ社会において「病」を持つということは、自分や身内が過去に罪を犯した結果だとみなされていました。社会的に冷ややかな目で見られるなかで、病人は肩身が狭く、身も心も凍りついていたのではないのでしょうか。そこにイエスの手が差し伸べられ、病人の心に生きる力が取り戻されていったのです。ただ、イエスに1度触れられただけでは、心の氷が溶けないこともあったようです。聖書には、「イエスがもう一度両手をその目に当てられると…見えるようになった」（マルコ8:25）とあります。それだけ、私達の心が固く閉ざされ、凍り付いてしまっていることがあるということでしょう。イエスが十字架に掛けられて亡くなられた後、弟子達は「家の戸に鍵をかけていた」（ヨハネ福20:19）といます。彼らはイエスを見捨て、失ったことで、先が見えなくなり、心が固く凍りつき、身動き出来ずにいたのです。その弟子達の心の氷を溶かし、新たに歩み出す力を生み出していったのが復活の出来事であったと聖書は告げています。

「こおり鬼」のようにある日突然、あるいは「バナナ鬼」のようにゆっくりと…心の氷が溶かされて、新たに歩み出す力が与えられていくとき、私達もまた復活のイエスに「タッチ」されている瞬間なのかもしれません。